

冬月孝太郎っていう人は、とにかく完璧だった。

四十二歳でIT企業の社長を務める彼は、百八十二センチの長身にピシッとしたスーツを纏い、きっちり分けた黒髪の横顔は取引先の女性社員が振り返るレベルで整っている。穏やかで腰が低く、誰に対しても同じトーンで話すため、怒鳴っているところなんて一度も見ることがない。(……完璧すぎて、掴めない人……)

いつも笑っていて丁寧だけれど、その笑顔の奥に何があるのか、二年間秘書をやっている私にも結局さっぱり分からなかった。

バツイチだっていう噂は入社してすぐに耳にしたし、元奥さんの浮気が原因だったらしいけれど、冬月さん本人がその話を誰かにしているのを聞いたことは一度もないし、聞けるような空気でもなかった。ただ、左手の薬指に指輪がないことだけが、その噂を裏付けていた。

好きになったのは、たぶん最初からだったと思う。配属初日に「よろ

しくね」と差し出された手が大きくて、握り返した瞬間に心臓が跳ねたあの時から、ずっと。

毎朝コーヒを淹れ、スケジュールを確認し、来客をさばいて出張に同行する日々。飛行機の隣の席で冬月さんが眠る横顔を盗み見ては、慌てて目を逸らした。

好きで好きで、どうしようもなかった。

でも冬月さんは誰に対しても同じで、私だけに特別な態度を取ることはないし、あの優しい笑顔は誰にでも向けられている。

社長って呼ばれるの堅苦しいからって、秘書の私にも冬月さんって呼ばせるくらいに気軽に親しみやすい人柄なのだ。

（二十五歳の秘書が、バツイチの社長に片想い……か）

ドラマなら見応えがあるかもしれないけれど、当事者はちっとも笑えない。想いが募るほどに仕事にならない日が増え、冬月さんが他の女性

社員と話しているのを見るだけで胸がぎゅっと詰まるし、たまに書類のやり取りなどで手が触れるだけで一日中そこばかり意識してしまう。

秘書としての判断力が鈍っているのは、自覚があった。

(……これ以上この人のそばにいたら、迷惑になっちゃう)

想いが募っていくが故に思い詰めて辞表を書いたのは、金曜日の夜だった。

終業後、社長室に残っていた冬月さんに声をかけた。他の社員はもう帰っていて、フロアには私たちだけだった。

「冬月社長。少しお時間よろしいですか」

「ん？どうしたの」

ノートパソコンから顔を上げた冬月さんは、いつもの穏やかな顔だった。書類を読むときにだけかける眼鏡の奥の切れ長の目が、柔らかく細まる。

（……この笑顔が好きだったな）

一瞬、そんな感傷に浸りそうになったけれど、すぐに我に返って要件を告げる。

「——お渡ししたいものがあります」

細長の封筒を差し出すと、冬月さんはそれを受け取って中を確認した。数秒の沈黙が流れる。

「……辞表？」

「はい。来月末で退職させていただければと」

冬月さんは封筒をデスクの上に置くと、椅子の背にもたれてこちらを見た。いつもの笑顔で、怒っても驚いてもいなくて、ただ穏やかに私を

見ている。

「急な話だね」

「……申し訳ありません」

「理由、聞いてもいい？」

「——一身上の都合です」

「それは書類上の話でしょ。本当の理由」

心臓がぎゅっと締まった。この人はいつもこうだ。柔らかい声で、相手の偽りをすぐに見破ってしまう。

「……すみません。それは——」

（冬月さんが好きすぎて……それが辛くて辞めたいなんて言えないよお……）

「まあ座って。落ち着いて話そう。コーヒー淹れるから」

冬月さんは立ち上がって、社長室の奥にあるコーヒーマーカーに向か

った。いつもと何も変わらない背中だった。

「ミルクは？」

「……いらないです」

「そう。じゃあブラックで」

手渡されたマグカップは温かった。冬月さんのコーヒーは、いつも少しだけ濃い。ソファに向かい合って座り、一口飲むと、苦くて熱くて美味しかった。

「二年間、よく頑張ってくれたと思ってるよ」

「……………ありがとうございます」

「でも、僕が聞いているのは理由」

「……………」

冬月さんはコーヒーを一口飲んで、穏やかにこちらを見ている。きっと下手な誤魔化しでは納得してくれないだろう。

「……好きな人が、います……その人のことで頭がいっぱいで……きつと、このままだと冬月さんに迷惑がかかっちゃいます……」

冬月さんが微笑んだ。いつもの、穏やかな笑みだが、なぜか違和感を覚えた。

「……そっか」

——それだけだった。追及もしないし、引き止めもしない。

「……特別ブレンドなんだ」

そう言つて、冬月さんは満足そうにマグカップを傾けた。

その穏やかな横顔を眺めていると、なんだか急に意識が遠のいていく。

——少し、眠い。

（疲れてるのかな。昨日あんまり寝てなかったし……）

瞼が重い。マグカップを置こうとした手から力が抜けて、カチャンとソーサーに当たる音がやけに遠く聞こえた。

「あ……すみませ——」

視界が歪む。冬月さんの穏やかな顔が、ぼやけていく。

（——あれ、おかしい。なんで、こんなに——）

意識が沈む直前、薄れる視界の中で冬月さんが立ち上がるのが見えた。

——笑っていた。いつもと同じ、穏やかな笑顔。

なのに、目だけが全然笑っていない。

（……冬月……さ、ん……？）

「——逃がすわけないでしょ」

その声を最後に、ふっと世界は真っ暗になった。

——ヴヴヴヴ……

最初に意識を覚醒させたのは、下半身の振動だった。

お腹の奥で、何かが震えている。低くて、一定のリズムで、止まらない。

(……なに……これ……)

頭がぼんやりする。まだ意識が覚醒しきっていない。目を開けようとしたが、瞼が鉛みたいに重かった。

体が熱い。下腹部が特に熱い。じんじんと痺れるような感覚が、ずっと続いている。

——そして、もうひとつ。

敏感な突端に、何かが吸い付いていた。

しゅぽ……しゅぽ……と、小さな吸引が一定の間隔で繰り返されている。優しい圧だった。でも確実に、あの場所を吸っている。止まらない。

ずっと――

(……っ!?)

目が開いた。

知らない天井だった。

白い天井。間接照明。窓の外に夜景が見える。――高層マンションの一室みただった。

広いベッドの上に、仰向けに寝かされていた。

両手首に、柔らかい布の拘束具が取り付けられている。痛くはないけれど、どうやっても抜けそうにはなかった。ヘッドボードに繋がれていて、腕が頭の横で固定されている。

(……一体……何が……?)

体を見下ろして、息が止まった。

私の服が変わっていた。着ていたブラウスもスカートもない。白いワ

イシャツが一枚だけを着せられていて、ボタンは半分しか留まってい
ない。下着は身につけていない。

そしてシャツの裾から覗く太ももの間に、それがあつた。

——ピンク色の、滑らかなシリコンの柄が見えている。

中に挿入されたバイブが低い振動を続けていて、そこから伸びたもう
ひとつのパーツが、私のクリトリスにぴったりと吸着していた。吸引と
振動が同時に来るタイプのオモチャだ。

しゅぽ……しゅぽ……♡ヴヴヴ……♡

(う、嘘……なにこれ……なにこれなにこれ……!?)

太ももの内側がぬるぬるだった。自分の体液でてらてらと光っていて、
シートにまで染みが広がっている。これがどれくらいの時間続いていた
のか分らない。

(……私、冬月さんと一緒にいて……でも、どうして……)

「ん……っ♡」

声が漏れた。意識が戻ったことで、それまでぼんやりと遠くに感じていた快感が一気に鮮明になった。中の振動がお腹の奥をじんじんと揺らしていて、クリへの吸引が規則正しく突起を吸い上げては離す、を繰り返している。

しゅぽっ……♡ しゅぽっ……♡ ヴヴヴ……♡

「っ……♡ あ……♡」

（だめ……声、出ちゃう……。ここ、どこ……冬月さんは——）
混乱する頭で状況を整理しようとした。社長室。辞表。コーヒー。それから——

（……コーヒーを飲んで……それで……？）

ふいに、ある仮説が頭に浮かんで背筋が凍る。

「コーヒー淹れるから」

あの穏やかな笑顔が脳裏に蘇る。冬月さんに淹れてもらったコーヒ―を飲んでいるうちに、強烈な眠気が襲ってきたことを鮮明に思い出す。

（そんな……まさか……冬月さんが……？）

しゅぽっ♡しゅぽっ♡ヴヴヴヴ……♡♡

「ん……♡んっ……♡♡」

考えがまとまらない。中の振動とクリへの吸引が、思考をぐちゃぐちゃにかき回していく。さっきまでは意識がなかったから耐えられていただけで、はつきり目が覚めた今、快感の輪郭が残酷なほど鮮明になっている。

なんとか拘束具を外そうと手首を動かした。布が擦れるだけで、やっぱり抜けない。脚を閉じようとしたけど、太ももの間に挟まったシリコンが邪魔で、閉じると逆に振動が奥に押し込まれた。

「ひっ……♡♡」

(……だめ。閉じたら、余計に振動が……♡)

今度は慌てて脚を開く。でも開いたら開いたで、クリの吸引部分の吸い付きが強くなる。どっちにしても逃げ場がない。

「やだ……っ♡だ、誰か……♡♡」

堪えきれず、声を上げると――

カチャリ。

ドアが開く音がした。

革靴の、硬い足音が耳に届く。

「――あ、起きた？」

おそるおそる顔を上げると、いつもの笑顔と同じ冬月さんが立っていた。

スーツのジャケットだけ脱いで、白いシャツの袖をまくっている。ネクタイは緩めてあった。手にはグラスを持っていて、中の氷がカラン、

と鳴った。

(……な、なんで、こんな状況で、笑ってるの……?)

社長室で辞表を受け取った時と、何一つ変わらない穏やかな表情だった。

「ふゆ……つき、さん……? なに、これ……っ♡なんで……私……

♡♡」

声が震えた。恐怖と混乱と、止まらない振動のせいで、まともに喋れない。

冬月さんはグラスをサイドテーブルに置いて、ベッドの縁に腰を下ろした。ふんわりとコロンの匂いがした。会社で嗅ぎ慣れた、あの上品な匂い。

「ごめんね。手荒な真似して」

本当に申し訳なさそうに眉を下げる。でも拘束を外してくれる気配は

ない。

「な、なにを……コーヒーに、何か……」

「睡眠薬だよ。ほんの少しだけね。体に害のないやつだから、安心して」

（あ、安心してって……!）

「は、外して……っ♡これ、外してください……♡♡」

腰がびくりと跳ねた。吸引のリズムが変わった気がした。

しゅぽぽっ♡♡しゅぽぽっ♡♡ヴヴヴ……♡♡

「んっ……♡は、はずし……♡♡」

「外す？——これ、入れてからもう二時間くらい経つんだけど」

「に、二時間……?」

「うん。弱めにしてたけど、途中で何回かイってたよ。寝たまま」

「……………っ」

意識がない間に、二時間も、この吸引バイブを入れられたままだったと聞いて血の気が引く。信じられないという思いもあったけど、シーツの染みが、その証拠だった。

「可愛かったよ。あんあん喘いで、腰も動かして」

「……な、なんで……こんなこと……」

「……君が悪いんだよ？」

「え……？」

「辞めるなんて言うから」

冬月さんの目が、初めて笑っていなかった。

声は穏やかなままだった。でも、切れ長の目の奥に、見たことのない色があった。

「あのまま逃がすわけにはいかないでしょ？」

しゅぽぽっ♡♡しゅぽぽっ♡♡ヴヴヴヴ……♡♡

「ひっ……♡♡」

冬月さんの手が、太ももに触れた。

内側を、指先でゆっくり撫で上げる。体液で濡れたそこを確かめるように、指の腹で辿っていく。

「……二年間。毎日、我慢してたの。僕が」

「え……」

「近頃は、君が隣にいただけでおかしくなりそうだったんだよ？この前なんて、飛行機の中で眠った時、髪の毛の匂いが堪らなくて——触りたくて、舐めたくて、それでも我慢してたんだ」

穏やかな声。でもその内容は、全然穏やかじゃない。

「……ふゆつき、さ……あ♡♡」

クリの吸引の強度が上がった。冬月さんがバイブのリモコンを操作していた。小さなリモコンを、まるでテレビの音量を調節するみたいな手

つきで。

しゅぽぽぽぽ……♡♡ヴヴヴヴ……♡♡

「ひあっ♡やっ……強く……なっ……♡♡」

「うーん……だいぶ出来上がってきたね♡ちゃんと味わっていたから♡」

冬月さんがネクタイに手をかけた。するりと抜いて、椅子の背にかける。次に袖のボタンを外して、腕まくりを整え直す。

それが、これから行われることへの準備だと気づいた時、背筋にぞくりと悪寒が走った。

「……ま、待って。待ってください……っ♡♡」

冬月さんはベッドに片膝をついた。拘束された私の太ももの間に、大きな体が割り込んでくる。

「味わうって……なに、を……」

冬月さんが、穏やかに微笑んだ。

「全部……だよ」

細い目が、私の太ももの間に落ちた。濡れて光っている肌と、ピンク色のシリコンと、吸引部分に吸われ続けているそこを、じっと見ている。「——ずっと、ずっとこうしたかった」

冬月さんの顔が、ゆっくりと、太ももの間へ降りていき、太ももの内側に触れる。

「ん……♡」

濡れた肌に、乾いた唇が乗る。内側を、ゆっくりと辿るように、唇だけがで這い上がってくる。

レロ……♡

舌先が一瞬だけ触れた。体液の跡を舐め取るように、太ももの付け根に向かってゆっくりと上がっていく。

「……………っ♡」

(やだ……冬月さんが……舐めてる……)

信じられなかった。会社で毎日顔を合わせていた、あの穏やかで完璧な人が、私の太ももを舐めている。しかもそこは二時間分の体液でぐちゃぐちゃに汚れているのに、気にする素振りもない。

「……………美味しい」

太ももの付け根、鼠径部のくぼみに唇を押し当てたまま、冬月さんが呟いた。

「ちゃんとぜんぶ綺麗にしてあげるからね♡」

「や……やめてくだ……ん……っ♡」

反対側の太ももに舌が移った。同じように、膝の近くから付け根に向かって、ゆっくり、ゆっくり舐め上げていく。

レロォ♡レロォ♡チュ……♡

「あ……♡ん……っ♡」

体液の筋を舌尖で丁寧に辿っている。太ももに垂れた分を一筋ずつ、拾い集めるように。膝裏にまで垂れていた分を舌の腹でべろりとすくい、付け根まで運んで、ちゅ……と音を立てて吸う。

「……ふゆつき、さん……なんで、そんな……汚いです……♡」

「汚くない。——ずっと君のここにむしゃぶりつきたかった」

冬月さんの鼻先が、股の付け根に触れた。すう……と深く息を吸い込まれる。

「……っ、かがないで……!!♡」

「シャワーも浴びてない、仕事終わりの雌の匂い。——最高だ♡」

穏やかな声で、とんでもないことを言っている。目元は笑っている。

いつもと同じ。でも鼻先を私の肌に押し当てて恍惚と目を細めている姿は、会議室で報告書を読んでいる冬月社長とは完全に別人だった。